

師が本当に必要とするサポートが何か分からないことも多そうです。

私は、教育にかける時間を業務時間内をしっかり確保できるような仕事密度の職場が理想です。今、定時で帰ろうと思うとどうしても学生への対応や初期研修医への対応、あるいは研究を削らざるを得なくなってしまう。そうではなく、教育や研究にしっかりと時間をかけられるように、仕事の密度をもう少し調整できるのが理想だと感じています。

柴田：確かに、教育にしっかりと時間を割ける体制作りは重要ですね。今、振り返ると初期研修医時代の充実した臨床教育のおかげで、医師としての基礎が固まったと感じます。臨床10年目、20年目の先生たちが、発熱時は血液培養を2セット取るといった教科書的な原則やベットのサイドの診察を大切にしながら診療しているの背中を見て育ったことは、自分の医師として大きな財産です。経験を積んだ後に手順を端



折ることはできても、最初から端折ってしまったら元に戻すことはできません。そのように考えると、医師としての土台を作る初期研修にはもっと人材と予算をしっかりと分配するべきだと思います。

佐藤：今後のキャリアについてはどうお考えですか。

柴田：今はスーパーウーマンがロールモデルになる時代ではないと感じています。私たちより上の世代の先生方は、血を吐く

教育や研究にしっかり時間をかけたい
仕事の密度を調整したい

スーパーウーマンしか活躍できない時代ではない
自分らしく自然体でやりたいことをやれるように

ような努力をして道を切り開いてくださいました。そのおかげで今は、多くの女性が仕事とプライベートを両立できるような時代になってきています。これからは「自然体でも自分の本当に進みたいキャリアを選べるよ」と後輩たちには伝えていきたいですね。

佐藤：私は、医師であつてもさまざまなポートフォリオを持つ時代が来ると感じています。今までの医師のキャリアは、医学部を卒業したら医師として一本道で生きることがほとんどでした。しかし、柴田先生のように本を書いたり母になったり、これからは一人の人間の中にさまざまなポートフォリオがある時代になるのではないのでしょうか。そう考えると、臨床もしっかりやりつつ、臨床だけではないようなポートフォリオ型のキャリアというのが主流になっていく予感がします。寿命も伸びていきますし、20代後半に決めたキャリアで人生100年時代を過ごしていくのも難しいと思います。

PROFILE 柴田 綾子 しはた あやこ

名古屋大学情報化学部卒業後、2011年群馬大学医学部を卒業。沖縄県立中部病院での初期研修後、2013年より現職。院内に留まらず各地での後進教育に携わる。SNSやオンラインを活用したセミナーで薬剤師や一般に向けた発信も積極的に行う。主な著書に『女性の救急外来ただいま診断中!』(中外医学社)、『産婦人科研修ポケットガイド』(金芳堂)、『明日からできる! ウィメンズヘルスケア マスト&ミニマム』(診断と治療社)など。『患者さんの悩みにズバリ回答! 女性診療エッセンス100』(日本医事新報社)など。 淀川キリスト教病院の「医師の働き方改革」の推進にも携わる。

す。医師は医師のまま死ぬ時代から、医師をひとつのポートフォリオとして他の何かに重きを置くキャリアも出てくるでしょう。私も今にとらわれず、反対に先のことも深く考えすぎないで、その時その時で一番良いと感じるものをやっていったらいいですね。

